

明治三十一年十二月二十六日 禮拜三 第三種郵便物認可

明治三十三年十一月一日 發行

(毎月二回一日、十五日發行)

次 目

社 説

◎真言宗の末路

◎豪傑、紳士

◎社會事業(其三)

論 説

◎教育の進歩と眞宗の信仰

齋藤唯信

◎下婢の待遇に就て

鹽谷良吉

社 會

◎新内閣の組織◎宣教師の大會◎野蠻の遺習◎大谷派本願寺職制改正◎日本

現時の社會◎紳商の風紀◎眞言宗分離事件と各宗派の運動◎横井時雄と佐治實然

雜 録

◎北遊確記

文學士 本多高陽

信 界

◎無畏の心

文學士 清澤滿之

會 報

◎相模南信徒同會東南信徒同會佛南信徒同會教南信徒同會◎尾張南信徒同會愛知南信徒同會佛南信徒同會教南信徒同會同志◎信濃南信徒同會

改教時報

第十四號

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報

眞言宗の末

日本佛教界の徳星と仰がれたる七里恒順師逝きてより、我邦の宗教界は引續きて天龍の峨山、淺草の奥田貫昭二師を失ふ傲岸にして譲らず、峻嶒自ら居ること峨山の如きは近來稀に見る所其死誠に惜むべきなり、然れども禪林向人あり、其衣鉢を繼承するもの蓋し人なきに非ず、思此に至らば余輩は尙不幸中の幸として少しく慰むるに足る然れども遂に吾人の愁眉を開く能はざるは、奥田師没後の天台宗也、蓋し師の如きは天台宗中、眞に唯一の人物にして今後師の如き高德の人を求むべからず、傳教大師の根本中堂は今尙巍然として四明の山巔に聳ゆと雖、秋風落葉、法燈漸く闇く人をして覺せず今昔の感に堪へざらしむ、之に次で更に吾人を痛ましむるものは眞言宗の現状なり、眞言宗は先に各山分離を請願し、其結果遂に其分離を許可せられ分離派は孰れも欣喜雀躍して管長を置き以て小山割據の形勢を作れり、而して今や各山分離より生ずる財政問題に附帶し遂に音羽、護國寺の大學林以下同宗の教育機關は全く廢絶して閉校するの止むを得ざるに至れり、嗚呼平安朝の昔し傳教弘法の二大師と並稱せられ、上は皇室より幕府に至る迄、多く縉紳の間に崇信せられたる天台眞言の現状を思ふ毎に余輩は誠に慷慨の情に堪へず、嗚呼清

○政教時報第四十一號目次

- 社説 山縣内閣の功過(○内務省訓令第八百七十七號を返上すべし)◎國家の盛衰如何に着眼せよ
- 論說 社會制裁の方法(上野法學士)
- 社會 佛教者の事業等
- 信界 橋慢なる私(曉鳥敬)
- 會報 各地教報

本誌廣告

- 一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
- 二、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
- 三、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 四、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十三年十一月廿一日印刷

發行所編輯人

上村幸三 橋本朝太郎

涼殿上諸宗の學僧と論議し南方に向て智拳印を結び即身成佛義を顯揚したりと傳ふる空海の雄風今何の處にか存する、試みに眞言宗の僧侶諸氏に問はん、眞言宗重きか管長の待遇重きか、布教興學と各山の分立と孰れか先んずべきかを、彼等は分離を知て興學布教を知らざる也、彼等は管長の待遇を知て、眞言宗の將來を顧慮せざる也、余輩は敢て分離に反對せず、然れども希くは少しく興學布教の途如何にしてなし得べきかの、根本問題を研究し、先づ眞言宗の爲に其基礎を確立し而して後初めて之を行ふべき也、今にして此失態を見る、一の雲照律師ありと雖、二三の有望なる青年ありと雖、同宗の衰微は遂に再び挽回すべからざるに至らん、目白僧園に衆庶の渴仰をつなげる雲照律師の徳と戒行を以てするも、今や其寄る年波と共に其老朽陳腐なる舊思想は漸く化石し去らんとし、到底我邦宗教界の使命を全くするに足らず、特に十善寶窟近來の議論の如きは却て人の謗りを招くの事なしとせず、苟も眞言宗の將來に着眼するもの少くも明治三十三年の日本を見るの常識あらば、宜しく全力を教學の振興に投じ、弘法、興教二大師の遺風を宣揚するに勤むべき也、嗚呼愚者は遂に度すべからず、彼等は學校を廢し、教育を犠牲にし、人物養成に意を注がず、徒に過去帳を回想して遂に其末路に急がんとす、苟も眞言宗の將來を憂ふるものは、高祖の廟前に九拜して其罪を謝し、奮然として蹶起する所なるべからず、嗚呼高野の山、根來の堂、之に次ぐに智積院、長谷寺、仁和寺、醍醐寺、大覺寺、勸修寺、隨心院、泉涌寺を以てし、

總ふるに東寺を以てせんか、眞言宗の勢力は未だ悔るべからざるものあり、然れども分ちて箇々となさば残る所殿堂のみ、死物のみ、餘は言ふを要せず、今や同宗畫一派の運動漸く盛んに、各宗又宗制寺法の遂に無効ならんことを恐れて伺書を内務省に提出し多少之に就て杞憂する所あるもの、如し、然れども自己の愚を顧みずして罪を内務省に責めんとするが如きは寧ろ徒勞のみ、彼等は公然として嘗て分離を請願せしに非ずや、彼等は各山獨立の後も能く宗門の教育を振張し、優に一派の體面を保ち得べきことを明言せしに非ずや、而して今や則此の如し、嘗て眞宗、禪宗、淨土、日蓮の諸宗と、優に拮抗對峙せし危然たる眞言宗にして、今や一學校たも維持する能はず、彼等の實力は公表せられたり、今日の結果は彼等自から招ける自業自得の禍のみ、否彼等の多くは之を見て耻辱と感ずる程宗教を思ふものに非ず、彼等は今後益々迷信の媒介者となり而して識者の笑を招き自滅するの外なきのみ、畫一派の徒にして此際眞言宗の爲に大に教育を振張し、其迷信的分子を除去し、空海の眞精神にもどりて、即身成佛の奧義を開闡するの勇なくんば、統一も無効のみ、運動も徒勞のみ、余輩は寧ろ自然陶法の大勢に一任して其覺醒するの日を待たんのみ、獨り怪む、眞言宗中學あり識ある有爲の青年にして一人の起て内部の刷新を呼號するの勇氣なきは何ぞや、知らず、彼等は此一大時機に際し尙冷然として十卷章を繕くや否や、卿等は高祖に對して今何の面目あるか、嗚呼、般鑑遠からず佛敎各宗の教徒希くは深く顧みる所あれ、

昔は日蓮上人絶叫して曰く眞言亡國律國賊と、今や京童相笑ふて眞言亡國の讖をなす、殿堂を存して教育を廢し、分離して管長の待遇を争ひ、加持祈禱の形骸を存して、大師の精神を失ひたる眞言宗の末路は再び日蓮の罵倒を要す、嗚呼各宗本山にある、羅刹豺狼の徒、堂班階級に戀々たる狗眼羊目の輩、彼の眞言亡國の僧と共に集めて護摩壇上に供し、焼て灰燼となさば夫れ快なる哉、

豪傑、紳士

大行は細瑣を顧みずといひ、男子芳を百世に流す能はずんば亦當に臭々萬年に遺すべし等の語は東洋的豪傑の常套語となり、氣を負ふの書生輩は却て之を理想とするに至る、かの「醉枕窈窕美人膝、覺握室々天下權」など詠せるもの眞個に此間の消息を言明せるものに非ずや、人固より神佛にあらざれば謹慎の上にも猶失行あるは免る、能はざれども、斯る操行不軌を以て理想とするに至りては佛法の限りに非ずや、文明諸國何れの國か眞面目に斯る卑き理想を有する所かある、余輩は斯る理想の流行は其國民の大耻辱と斷言するものなり、古來東洋には豪傑の士には操行を責めざる奇習ありといふも雖も、我邦の現今の如く、理想卑屈にして操行不軌なる世は未だ和漢の史乘には見受けざるなり、今假りに我國古來の偉人に就て例を取らんか、頼朝、尊氏、秀吉、家康等は我邦第一流の豪傑たるは異論なかるべし、是等豪傑の操行を採

究せんか、随分缺點も無きにはあらざれども、割合に其操行は潔白にして、其家庭等には摸範とすべき所多きを發見すべし、頼朝も壯年の時には伊東祐親の女に通せる如き仕儀ありと雖も、後年に至りては、當時一夫一婦の論議もなく、貴人は數妾を蓄ふるを常例とせる世に在りながら、格別内行の修まらずして、多く蓄妾せしを聞かざるなり、尊氏の如きは、大義名分を以て論せば世已に定論あれば、今は措く其一身の品行に至りては、寧ろ摸範とすべく、失行少かりしなり、秀吉の如きは、千利休の女に懸想せしとか、蒲生氏郷の未亡人に思を寄せしとか、種々の艶名を流し、人なれども、決して常人の想像する程嬉行家にあらず、其家庭の如きは最清潔なりしなり、かの北廳淺野氏との結婚式の如き、又淺野氏と終始琴瑟相稱ひし如きは、世の美談とする處なり、況んや太閤が大政所に對して至孝なるは寔に千歳の下、公が一異彩を放つ所なり、かの太閤所定の十三箇條の如きは、今日も猶吾人の仰いて遵守すべき家庭の良憲法なり、家康亦細心家庭に注意し一身の操行謹嚴なりしは多く世に傳ふる所なり、明治維新は我邦歴史有りて以來の大改革なりければ、豪傑の輩出せし事も隨て多く、其今日に生存せる所謂元勳元老なる者は其伎倆其功業優に國史を飾るに足るべし、此盛世に遭遇したるは余輩の大に喜ぶ所なりと雖も、顧みて其家庭其内行を見れば、古來の乱世の英雄にも見受けざる濫行多くして、家庭の摸範とすべきもの甚だ少きは余輩大に悲む所なり、彼元勳の中にも指を第一に屈せられ宮中の御覺えといひ、世の

信頼といひ、至重至大の責に任すべき一豪傑の内行を見よ、かの廿七八年の日清戦役に際して、畏くも大元帥陛下は狹隘なる一室を行在所と定め給ひ、日夜宸襟を惱し給ひしに、かの元老は如何に振舞ひしか、當時の詳細なる起居動作は余輩之を知らずと雖も、當時右の元老が歸京の際、勳位高爵の外に愛妾を携へたりしを見て、余輩は一掃異様の感に打たれたりき、又過日山縣内閣總辭職以後新内閣成立まで殆一ヶ月此間に於ける右元老の舉動も亦以て余輩の腦漿を少なからず刺激したりき、如何に色を好むは英雄の常とはいへ、餘りに極端なるに呆然たりざるを得ざるなり、實に東洋の英國と誇稱せる我大日本帝國の名譽を代表する元老にして、如何に其伎倆は超凡卓絶ありとするも、其私行に於て餘りに紳士の舉動を去る事遠きは其人の爲に惜み、國家の爲に悲み且耻辱とす、憶ふに其人といへどもマサカに一種のマニユアにもあらざるべし、自ら却て之を磊落とし、風流として之を慎むの意なきに由るべし、少しく謹慎の念だにあらば、かばかりの克己は忽ち出來得る事なるべし、希は國家の體面の爲に、國民の風教の爲に少しく注意謹慎せられんことを望む、余輩は初より其人に恩怨なし、寧ろ少からず同情を表するものなり、故に敢て一言を呈す、嘗て此一元老のみならず、所謂世の豪傑達の餘りに磊落風流のみを以て得たりとせずして、豪傑の資に兼ねるに紳士の行を以てせんこと余輩が切望する所なり、

社會事業 (其三)

社會事業は單に一二の事業のみを以て足れりとするべからず、必や孤兒教育、悪少年感化、監獄改良、出獄人保護等の事業相連絡して共に相助け相成さるべからざる所以は、已に略陳しぬ、次に注意すべきは、社會事業は唯一地方のみにて何程整備するも其効果は至て薄弱なり、各地方相並んで起さるべからざるなり、單に一地方にて事業の興起は當に効果の薄弱微小なるのみならず、時として隣地などに於ては却て害を受くる事あり、例せば湯殿東京市養育院に於て、感化部を新設し、府下の悪少年を馴ら集めて收養に盡力せるより、浮浪の悪少年等は、感化院の性質は固より知るべくもあらざれば、一種の監獄の如く誤認し、感化院に入るを忌避し、東京に在りては巡查に引致せられて感化院に送らるゝ恐れあるを以て、皆相率ゐて横濱市に逃れたり、されば浮浪悪少年多き東京市にして各警察に於て盡力せるにも拘らず、今日に至るまで漸く三十餘人を收養せるのみなり、之に反して横濱市には自然に浮浪悪少年増加して、種々の小犯罪者は多きを加へたる如き結果を來せり、此一例に於ても明に知らるゝ如く、各地相共に相携へて慈善事業を起さずんば、効果は大に減削せらるゝものなれば、諸地方各府縣競て慈善的社會事業を興されんこと余輩の深く希望する所なり

論 說

教育の進歩と眞宗の信仰

齋藤 唯 信

久しく我國人士の腦裡に潜める鎖港攘夷の思想は明治維新の大業と共に一洗せられ開國進取の道大に開けてより茲に三十年此間泰西の文物駁々として輸入し來り有形と云はず無形と云はず著るしく我國文化の度を高めたりき殊に教育に至りては維新已前に在りては寺子屋教育と稱して兒童に對し教ふるに習字算盤を以て足れりとし稀に四書五經の素讀又は講義を聞くものあるも其は甚だ少数にして一郷一郡に通して眞に指を屈するに過ぎざりし殊に國民の大多數は文字を見るの明なくして自己の姓名だに記すると能はざりしも尙能く忍びたる時代なりき然るに維新已後に至りては教育の業盛んに行はれて尋常小學の上に高等小學を設け高等小學の上に尋常中學を設け尋常中學の上に高等學校、高等學校の上に大學の設けありて教育機關の大に備はれると維新已前と維新已後の今日とは天淵月鼈も管ならざるなり故に我國民智識の程度に於て維新已前は論理心理の學は勿論化學物理等の學と雖も之に通曉するもの甚だ尠く現今何人とも雖も敢て疑を挿まざる電信又は蒸氣軍車の如きすら尙其働きを聞見して魔法又は幻術なるかの感を懷きたりしに今日に至りて乳臭未だ脱せざる年少の者と雖も猶其等の感に打たる、もの無く教育機關の備はる

と共に智識は益々進歩發達して停止する所無からんとす然るに佛敎諸宗の中眞宗は其敎旨普く都鄙に行き渡りて信仰するもの甚だ多し然れども其眞宗の信仰に至りては我身は現に罪惡生死の凡夫曠劫より常に没し常に流轉して出離の縁あることなしと自身を省みて愚鈍無智の罪人なりと卑下するが故に智識の進歩發達に對して違害すること甚だ尠からざるに似たり是を以て青年學生の中或は謂らく維新已前の國民智識の進歩せざる時代にありては此の如き信仰の社會に容れらるゝこと敢て怪むに足らざるも今日普通教育の上に更に高等教育を受くる者に於ては到底此の如き信仰を惹き起すこと能はず只信仰を惹き起すこと能はざるのみならず將來教育の進歩と共に眞宗の信仰の如きは到底存立すること能はざるべし否國民教育を害すること甚しと謂はざるべからずと云ふ是れ果して適當の考慮なるが余をして一言之を評せしめば皮想一片の僻見にして甚だ眞宗安心の何たることを知らず只眞宗安心の何たることを知らざるのみならず復吾人の智識なるものは如何なる程度の者なるかを知らざるものなりと云はんはとす乞ふ少しく之を説かん

夫れ我人の智識は如何なるものか、教育の力によりて益々進歩發達すべしと云へども、其進歩發達は何れの點迄なるぞ、如何に教育の力らに由りて進歩發達しても到底有限的不完全なることを免るゝこと能はざるなり何となれば吾人の智識の對象たる宇宙は空間以て之が經となり時間以て之が緯となる而して其經たる空間は限量方分あるが東西南北何れを眺ても其

邊際あることなく實に空々漠々として無限無際なるものなり又其緯たる時間は始終の限量あるか是れ亦其始めを尋ねるも之れが第一の起點となすべきものあることなく其終りに求むるものも之れが最後の末端と爲すものあること無し既に緯たる時間は至長悠久に其經たる空間は至廣寥遠にして二者叫れも無限無際なるが故に之に織りなされたる千界萬象は限量ありとすべからざるなり、然るに之に對する我人の智識は如何、いかに教育の力によりて智識が進歩發達すとも吾人智識の及ぶ所は時間に於ては無限時間中歴史の研究によりて僅かに其四五十年前後の事を知るに止まり又空間に於ては無數なる萬物が各其處を得て整然として空間を占有しつゝ、あるにも拘はらず吾人の了知する所は僅かに其一部にて恰も大海の一滴富岳の一塵に類するが如きのみ况んや自己一身の上に就て之を見るも自己の此世に生存する理由自己の由りて來る本源自己の去りて行く處等一々之れが推問を試みるも到底明答し能はざるおや是れ即ち自己智識に限りありて不完全なることを證するものに非らずして何ぞ殊に今日科學の研究より更に進みて實體界の研究に至れば研究するに隨て益々萬物の幽玄高妙なるに驚くと共に遂に萬物不可知なりと推斷するに至る是れ教育が非常に進歩し智識が益々發達するにも拘はらず吾人の智識の不完全なることを自覺せしむるに過ぎざるにあらざるや

夫れ然り而して宗教の目的は何ぞ、確乎不拔の信仰を確立し佛陀圓滿の境遇に到達せんとにあり而して其佛陀とは何ぞ佛

陀といへば人多く佛教徒のみ崇敬すべきもの、如く思ふは是れ大なる誤謬にして苟も智力の發達を期し人間本來の眞面目を發揮せんとするものは皆以て崇敬すべき者たるなり何となれば佛陀とは覺者にして即ち圓滿無缺の大智者なればなり而して佛教徒の崇め且つ敬する所以のものは其教によりて佛陀たらんとするにあり今眞言の安心に於て我身は現に罪惡生死の凡夫曠劫より常に没し常に流轉して出離の縁あるとなく實に愚鈍無識の者と自覺するは是れ其目的が佛陀といへる廣大圓滿の智者たらんとするにありて其廣大圓滿の大智者たらんとするには自己の心智無能無力にして到底企て及べからざるが故に我身は現に罪惡生死の凡夫等と認識する者なりされば眞宗の信仰は教育によりて智識が進歩して其進歩せし智識が更に進めば進むに隨て益々對象の高妙なるに驚き遂に萬物不可知なりと論斷し以て自己心智の不完全なるを自覺すると頗る酷似するに非ずや重言すれば彼れ學術の進歩の結果が萬物不可知にして自己智力の不完全なることを認識せざるべからざるが如く今自力を以て大智圓滿の佛陀たらしんするに其に應ずる力なかるべからざるに我身を顧みれば罪惡不善にして愚鈍無才なるが故に佛陀となることを得ずと自覺せざるを得ず是れ教育と宗教と其趣き大に異なるれども自己の心智を認めて不完全とするとは同一なり果して然れば機の深信なるものは智識發達の結果と背馳せざるのみならず寧ろ智識發達の結果は眞宗の機の深信を惹き起す資助力ともなるものと云ばざるべからず

是に於て人或は云はん憍慢と卑屈は人生に於ける二大缺點にして吾人常に戒慎抑制せざるべからざるものに屬す然るに今眞宗の安心に於て我身は現に罪惡生死の凡夫にして曠劫より常に没し常に流轉して出離の縁あることなしと云ふはこれ即ち人生二大缺點の一たる卑屈に墮落したるものにあらずやと余之に對して曰はく其は只眞宗安心の一面を見て未だ他の一面を見ざる所謂機の深信あるを知りて法の深信あるを知らざるものなり眞宗の安心は一面には機の深信ありて自己の無能無力なることを自覺すると共に他の一面には自身以外に廣大圓滿の佛陀たる救世者を認め其救世者たる佛陀の力により自ら大智者たらんことを確信するものなり此佛陀の力によりて大智者たるべきことを確信することを得るや踊躍歡喜の念と共に勇氣勃々として禁じ難きの情あり此踊躍歡喜の心を起せりて憍慢心を退治し又法の深信によりて卑屈心を退治し敢て卑屈の方に流れず憍慢に止まらず憍慢と卑屈との二邊を離れたる中道圓滿の安心と云はざるべからずこれ余が眞宗の信仰を以て教育の進歩と背馳せざるのみならず教育進歩の結果か寧ろ機の深信を惹き起す資助力ともなるべしと云ふ所以なり

下婢の待遇に就て

在慶應義塾大學 鹽 谷 良 吉

日本の社會には、廢すべきもの、新に起すべきもの、または改良を加ふべきもの最と多し、余が茲に云はんと欲する間

題は、即ち此改良すべきもの、一にして、下婢待遇是なり、如何なる種類の人が、如何なる目的を内て下婢となるやと云ふに、多少の取除はあるべしと雖、先づ大概は資産なき人の子が、自ら嫁入仕度を作り、且つは將來人の妻となりたるを、踏むべき一通りの道を心得ばやとて雇はるゝものなり、されば下婢なるものには、無教育にして貞操の何たるをも辨へず、魯鈍無作法にして縫針應對等を知らざるもの多きは、蓋し數に於て免れ難き所なり、されど彼等も亦人の子なり、行末は人の妻となり、人の親ともなるべき身なれば、彼等が當初の目的を達し、嫁入仕度も作り、一通り婦人の道を知り得るに至ると否とは、獨り彼等自身の幸不幸の岐るゝ所なるのみならず、纏て全社會幸不幸の係る所なるが故に、世の下婢を召使ふ家の主夫たるもの、殊に一家内務の總取締たる主婦たる程のものは、深く此事に心を注ぎ、其雇入の始に於て、善く下婢の性質及人となり等を察し、足らざるは之を補ひ、知らざるは教へ、邪なるは之を矯め、正しきは之を奨勵し、以て一人前の婦人となし、彼等の目的を遂げしむるに努むべきは云ふまでもなき事なり、然るに實際世間の有様を見るに、斯の心を以て下婢を遇するもの甚だ少なく、主婦と下婢とは殆んど敵同士の如く、主婦は下婢の無能を罵れば、下婢は又主婦が餘りに人遣荒きを恨み、主婦は下婢が物を捨てたる事多しと小言を云へば、下婢は主婦の吝嗇にして頂戴物の少なきを嘔ち、主婦は下婢の無性を叱れば、下婢は又主婦がお化粧、お磨にのみ念を入れて、お仕事には少しも手傳つ

て呉れぬと隘口をするなど、恰も古昔ありしと聞く敵國の奴隸と、其主人との關係の如し、斯る有様なるを以て、下婢は永く同一の家にありて、其目的を遂げ得るもの甚だ少なく、甲の家より乙、其れよりまた丙の家へと流れ歩く中には、自ら忌むべき奉公人根性なるものを生じ、人の眼の前にて一寸動振を見せ、眼のなき所にて怠けねば損と云ふ様なる考になり、遂にはあばずれ者、すれからし者となり、婦人の道に覺ふるなどは扱置き、却てあらぬ方に身を腐らすもの、比々皆然らざるはなし、實に彼等の爲め又社會の爲め、嘆むべき次第と云ふべし、是等は一口に之を云へば、下婢其者の罪なるが如きも、余の考ふる所によれば、之を使用する人も亦其責を分たさる可らざるなり、前にも述べたる如く、下婢なるものは、概して無教育のものなれば、隨て事理に暗らく、種々の誘惑に誤まられ、色々の惡風に染み易く、動もすれば様々の罪惡を犯さんとする危險なる位置にあるものなり、故に下婢を使用するものは、常務を取らしむる外に、相當の指導を與へ、教訓を加へ、女の道一通は無論、經濟向の事、縫針、料理、應對、贈答、若し出來得べくんば普通の算筆をも授け、其目的を遂げしむべきは、社會に對する義務なり、然るに世上多數の人は、自ら逸樂に、言ひ換ふれば自分の職分を盡さず、安逸に、怠惰に日を送らんが爲めに下婢を雇ふかの如く心得、臺所の事に手傳ふは、自分の品格を卑くし、不名譽此上もなきかの如く思ひ、勝手元の仕事は、一切之を下婢の負擔に飯し、能

はされば即ち之を教へずして叱り罵るなど、眞に以の外の心得違ふ云ふべきなり、

人類が社會的生活を爲すに於ては、種々なる義務を有せざる可らざるものにして、若し人にして此義務を怠らんか其人は決して幸福なる生活を爲し得ざるものなり、一家の表向きは主夫之を處理し、奥向の用事は主婦之に當るべきは、蓋し自然の義務なるを以て、一家の主夫たり主婦たるものは、片時も之を怠るべきものにあらざ、若し其の義務を忘れ、擧げて之を他人に委するが如き人あらば、其人々は決して圓滿なる家庭を爲る能はざるなり、社會が進歩するに隨て人事益々複雑極め、家務漸く繁を加へて始めて人を雇ふの必要起るものにして、人を雇ふ目的は、即ち自分の手の達せざるを補はんが爲めにして、決して自己の義務を他人に盡さしむる爲には非ざるなり、されば下婢を使役するには、唯々主婦が自分の職分を盡すに當りて、其手助けとする心を以てすべきものにして、堪難き負擔を課し、之を叱り罵るか如きは、たゞに下婢の不幸なるのみならず、自然の理にも背戻する處置たるを信するなり、

我幾萬の讀者よ、諸子今假りに、無教育にして羞惡の心なく、品性汚劣にして貪婪飽くを知らざる母を有てりとせよ、諸子は果して如何なる感起すべきか、余は信ず、諸子の血涙長くかわく時なかるべきを、下婢を遇すること今日の如くなるは、是れ即ち彼等をして羞惡の心なからしめ、其品性を汚劣にし貪婪飽を知らざるものたらしむるものなり、而して彼等

は將來人の母たるべきもの、彼等を母とする幾千百萬の兒女は、果して幸福たるを得べきか、余は信ず彼は朝に泣きまた夕に泣き、一生を涙の中に送らんとを、然り而して其の此に至ると否とは、一に之を遇するの如何にあり、是れ不才自ら揣らず、茲に本論を草する所以なり、希くは大方の諸子、佛子の心を以て彼等薄命なる同胞を憐み、相助け相救ひ、共に圓滿なる社會に到達せんことを

社 會

◎新内閣の組織 最も難産の聲高かりし新内閣は漸く組織せられたり、其特色とすべきものは元老株の排斥せられたるにありと云ふも、新大臣の顔を見るに舊自由黨の四總務委員あり其他外務大臣を除く外伊藤侯の幕下にして、藩閥に代ふるに黨閥を以てしたるに過ぎず、何の特色かこれあらん、山縣内閣の瓦解は偏へに伊藤侯の政友會を組織し暗に内閣を箝制したるによると云ふ、果して然らば伊藤侯の新内閣は政友會の後援にあるや、固より疑ひを存せざるなり、新首相たる、伊藤侯は表面獵官に反對すれども、政友會の後援による伊藤内閣は實際上其黨員の獵官運動を如何にして抑へんとするか、早くも既に文官任用令の改正あるべしと傳ふ、是れ何の兆ぞ、

更に吾人の一言すべきものあり、大隈伯に縁故淺からざる加藤高明氏を擡擢して外務大臣の椅子を興へたることは是なり、にありと云ふを憚らざるべし、此際吾人の望む所は「ハネの精神の翫味にあり」彼は必ず盛になり我は必ず衰ふべし」

◎野蠻の遺習 軍隊の重する所は規律の嚴肅にして秋毫も冒す所なきにあり、然れども嚴肅も其度を過れば殘忍酷虐の所爲に流るゝを忘る可らず、吾人は軍隊教育に就ては多少の意見なきにあらざれども、そは他日機を得て論ずるの時あらむ、たゞ一事茲にいふべき事あり、新聞紙の所報によれば此程姫路の兵營に於て、一兵卒が所持の金圓を盗れしにつき、種々吟味を遂げしも其犯人を見出すこと能はざるより、仲間の投票を以て之を定むること、なしに、石井某なるもの最高點に當りしかば、曹長某は最も嚴酷に拷問したれども身に覺なき事とて白状せず、遂に其身の潔白を表し且つは汚名を雪かんとて、遺書を認め自殺を遂げし後、眞の犯罪者出でたりとの事これなり

これ伊藤侯非常の果斷に出でたると云ふものあれども、事實全く相違するものあるを如何せん、曩に政友會を組織するや郵船會社の一派並に岩崎家は八萬圓を政友會に投せり、伊藤侯の起つに當り彼等と關係深き加藤氏を推して外務の一脚を興へられんことを裏面より盛んに運動したるを以て、伊藤侯も斷然拒絶しがたき、情實あり遂に加藤氏を擧げたる所以なりと、郵船會社一派の此運動は加藤氏によりて航路補助金にありつかんとする卑劣心に出でたるは毫も疑ひなき所にし、堂々たる一國大臣の進退は常に情實の支配する所となるは豈浩嘆に堪ゆべけんや、人民たるもの未だ容易に枕を高くすべからざるなり、

◎宣教師の大會 去月東京に於て基督教宣教師の大會を開きたる由なるが、未だ其詳報に接せざれども、今回の會合にて彼等の論究すべき問題は、傳道に於ける各派協同の區域如何、聖書翻譯の改正、讚美歌並教書類の出版を如何にすべき乎、先般來彼等の間に一問題となり居たる教育問題即ちキリスト主義大學の設立如何、此等は主要なる問題として顯るべしと傳へられたり、

現今我國に宣教師を派遣する外國傳道會社凡そ三十三、教派凡そ十九にて男女の宣教師合せて七百二十七人なりと、此の會合に付きて「毎週新誌」は論じて曰く、吾人をして遠慮なく我國傳道の大計を吐しめば、吾人は其大計は如何にして日本の教會を發達せしめ、如何にして日本人の手を以て日本の各地に傳道せしむるを得るやの一事

未開の世にありては往々之に類することありしも、今日に於て尙此野蠻の遺風行はるゝは、軍隊の不名譽此上なき事にして、其影響や人民をして悉く徵兵を忌避するに至らば、其責何人か之を負はんとするか、よし斯の如き事起らずとすも古參の兵士か新兵に向て奴隷同様に虐遇の事あるは吾人の屢々耳にする所此等の事とも軍隊教育上深く注意を乞はざるべからず、殊に今回の出來事の如き決して等閑に附すべか

怪千萬の現象にあらざるや、

日本現時の社會は何等の制裁あるなく、假令詐偽を行ひ奸誦を逞しうするも、はたあさましき行爲あるも、富豪者と見れば何人も之を指彈し社交上の自殺を遂げしむる底の社會的制裁を加ふるなし、詳言すれば拜金主義が滔々として風潮を逐ふの今日、彼等富豪者所謂紳士紳商なるものは思へらく、凡ての不名譽なる行爲は金力を以て之を壓迫し去るに難からじと、金力の前には會て抵抗の力を認めざるなり、人類は黄金の奴隸なりとは彼等の理想にして亦現實に之を行ひつゝある所なり、西哲曰く富豪者に向て道を傳ふるは、針の孔より駱駝を通はすよりも難しと、彼等富豪者に對してはげに濟度の匙を擲たざるを得ず、何の時代かよく彼等の跳踉跋扈を見ざるに至るべきか、

◎大谷派本願寺の職制改正 大谷派本願寺にては自今諸經費を節減し、役員の淘汰を行ひ、職制を改正せんとのこと、去月開會したる議制局通會には、財務整理案として明年度の豫算案を呈出し、屹度決議を爲さしむる筈にて、法主及在東京の新興主も賛成を爲したる由、而して職制の改正には總務を廢して、執綱を置き、之を今の總務大谷勝緑氏に任し、參務準參務を廢し、寺務總長を置き、石川舜台氏に任し、在來の布教局勸學局を合して教學部とし、會計檢査局と監正局を合して統制部とし、特別教務局と庶務課を合して庶務部とし、會計局を會計部とし、准參務谷下然を教學部長、准參務和田圓什を庶務部長、准參務平野履信を統制部長とし、而して法務局は從前の通りとして參務小林什尊を局長とし、久しく局長缺員ありし内車局も其儘とし准參務佐々本祐寛を之が局長とし、尙引き役員の淘汰を行ふよし

◎神商の風紀 聞く府下の豪商某氏は、近來會社員の風習放逸に流るゝの弊を憂ひ、其配下の重役支配人等を集め、自今營業上止むを得ざる場合の外は無用の宴會を全廢し、營業上必要の時と雖も賤妓の侍し易き日本流の宴會を避けて西洋流の宴會に改むべし、日本流の宴會を催す場合には決して賤妓の出入せざる會場を擇び、若し之が實行を望まざるものあらば、自今其等の銀行會社と關係を絶たざるを得すとの旨を説きしに、一同これに同意して即座に實行の申合せをなしたりと云ふ、吾人より之を觀れば、品位を重するは人たる者の當然爲すべき行爲にして、敢て贊辭を表する迄もなしと雖も、千金を擲ちて豪奢を競ひ、放蕩亂費の結果種々の弊實を

醸す彼等社會にして、今回の舉あるは洵に美事として之を賞するに吝ならざるなり、

分派獨立することを許さざるの規定あり、而るに其認許の變更取消あらざるに拘はらず、其宗制に違背し分派獨立を企つる者あるときは、管長は此者に對し違反者と見做し、處分するを得ざるものに候や

◎眞言宗分派事件と各宗派の運動 先に内務省が眞言宗本山分派獨立の許可を與へしにつき、各宗總代より左の伺書を内務大臣に提出したりと、

一、此の如き反則行爲は住職個人の行務にして、寺院代表の行爲にあらざりと思料せるに、御省は寺院代表者の行爲と看做し御處分せられたるが如し、住職は斯る不法行爲をなす能力を有するものに候や

◎眞言宗分派事件と各宗派の運動 先に内務省が眞言宗本山分派獨立の許可を與へしにつき、各宗總代より左の伺書を内務大臣に提出したりと、

一、前記の行爲を違法にあらざれば、如何なる理由に基く者に候や

佛道各宗派、宗制寺法は悉く御省の認可を得し者にして、其宗制寺法は各宗派唯一の憲法として、各宗派は之れが條規に則り以て其所轄宗派の統治をなし、任免賞罰等の權能を具備し、政府亦之れが行爲に對しては其權能を認認せられ來れり、爾るに其宗制寺法に關して、彼眞言宗に於ける近時の状態を見聞するに、其宗典の範圍内に屬する各本山が眞言宗々會正當の手續をも履行せず、該宗長者を經由せず、其宗典の所定事項を度外に付して、分派獨立の請願を爲したるに對して、御省は之が認許を與へられたるのみならず、訓令を發して其所屬寺院を強制せられたる如きは果して其當を得たるものか、今之れが影響として佛道各宗派に於ては、宗制寺法の權能及び其基礎を薄弱谷易ならしむるの一大恐慌を惹起せる次第に御座候、仍て宗治上不得止左項の通り相伺候

一、宗制寺法上に於ける正當の手續をなさずして、出願したる願意を認許し、然る後其宗制寺法の一部取消を訓令せらるゝが如きは全く宗制寺法を無視せらるゝが如き感あり政府寺法に對し現今及び將來に於て如此行政の方針に候や

佛道三十一宗派總代

右何分の御指示迅速に奉願候也

天台宗座主 中山 支 航 淨土宗西山派管長 久田 徹 道
臨濟宗和國寺派管長 中原 東 嶽 黃檗宗管長 吉井 虎 林
曹洞宗管長 峠上 棟 仙 眞宗大谷派管長 大谷 光 益
眞宗佛光寺派管長 邊谷 徹 妙 定 院 日蓮宗管長 岩村 日 轟
華嚴宗管長 佐保 山 晉 圓

内務大臣男爵末松謙澄殿

◎横井時雄ト佐治實然 佐治實然は還俗僧なり骨て尊皇奉佛大同團を唱へ、後衆議院議員の候補を争ひ、落第して

佛道三十一宗派總代

ユニテリアンに投ず、本年の初めより六合雜誌に「四十三年の我」といへる懺悔録を出し、大に醜陋の文字を列す、ユニテリアンの悟りとは夫れ此の如きものか、横井時雄は基督教の牧師なり、彼嘗て本郷竹町の教會に雄辯を振ひ大に基督教を宣布す、後遂に牧師を止め大に倫理運動を唱導し、而して遂に立憲政友會に入りて全く俗了す、一は佛教より政治運動に移り、後ユニテリアンとなり、他は基督教より倫理運動に變じ、遂に政治家となる、而して實然は大に蓄財家となれり、稱す、時雄君希くは又金森通倫と伍して大に蓄財の徒たれ、世呼んで之を人間の進化と稱す薄志弱行の宗教家、以て好模範となすに足る、

北遊雜記 (八) 本多 高陽

札幌所觀と申しても、前にもいふ通り、唯一日の事であるから、別に記す程の事も無いが、モ一少し書いて此稿を終らう、僕等が札幌へ往たのは四月廿二日の日曜日有たが、此日は丁度札幌博物館の開館日有たからこれ幸と這入て一覽した、博物館と言たどて固より首府の比得べきものでは無い事は、誰れしも想像が出来る通りで、建物といひ、蒐集の物品といひ、固より比較にはならぬ、殊に美術品とか、古書書古器物等は皆無といふても宜しい、併し北海道だけに、北方産の魚類獸類等の自製などは随分澤山ありて、逆も東京

博物館は叶はぬ様である、又鱒魚の立て網、指し網、鮭魚の網模等には面白く感じた、道廳では智識普及を計る爲に入場料は取らない、けれども例も甚だ淋しいソーな、此日は今年始めて開場した日で諸學校の生徒などが見に来たから、随分賑か有た、山鼻村の大谷派別院へ參詣して、誰かに面會を求めたが、皆不在で小使より外に人の居なかつたのは残念で有た、報恩講の時などには随分此別院も參詣人が多しソーで、函館、江刺と共に北海道の三別院というて、盛など指折られて居るソーだが、平日は至て寂寥たる有様である、總體北海道の三區中では、此土地が最佛教は振はないのであらう、夫には種々の原因もあらうが、余の鳥渡思ひ付た所では、第一は此地は耶蘇教の盛大なる事で、第二は函館や小樽とは、元來區民の成立が別異である事であらうと考へる、函館でも小樽でも其發達は自然的で有て、商業漁業が重なる生業で有て、住人の多くは官民と區別して見れば無論民で、士族か平民かと言へば先づ平民のみより成立して居る、其生國は何處かと問へば、南部、津輕の人で無ければ、北陸の人であるといふ様に、海路の交通の便なる地方より來た人が大部分を占めて居る、札幌は大に事情を異にして、始より道廳を置くといふので、札幌の繁昌の中心は政治である、札幌へ最も早く來たものは官吏である、教師である、學生である、軍人である、今日も猶是等の人が札幌繁榮の一要素を爲して居る、夫であるから札幌には比較的士族が多い、學者が多い、札

幌人の故郷を糺しても、官命を受けて來た人が多いと同時に處々方々の人が有りて、逆も何れの地方が多いと想像も付かない、一時開拓使廳が薩州人の手に在たから、薩州人は多くて其勢は凄まじいもので有たが、今日では夫も過去の話である、所詮何國人が多しといふ事は一寸は分らぬ、コ一言て來れば自然函館や小樽の如く、佛教が繁昌せぬといふ事が知れて來しやう、全体佛教は士族よりも平民、官吏社會よりも民間に盛で、又北國は音に名高い眞宗の盛な土地であるから其土地の人が多く寄り集た處は亦佛教が盛である、所々方々の寄り集りて、殊に眞宗や日蓮宗の如き熱心なる宗旨の流行せぬ地方から來た人達の所にば佛教は容易に榮えないのである、今一ば耶蘇教の盛なのであらう、僕が見聞した土地で最耶蘇教の盛なのは、先弘前と札幌であらうと思はれる、弘前は有名なる本多庸一氏の出生地で、同氏が學校を設けて多年同市の後進を薰陶せられた結果は著しいもので、彼地の少し新智識を有する者は概ね皆眞摯なる有神論者であるとの事、耶蘇教的感化が胸底に染み込んで居ると申します、札幌も斯の趣がある、前にも申した通り、農學校は全く亞米利加的組織であるが從て宗教も耶蘇教は校内で甚だユライ勢である、其又農學校は札幌に於ての勢力は非常なものである、農學校に耶蘇教の盛なといふたら、學生等が基督教青年會を組織して、得々揚々と威張りて居る計りでない、御雇教師が教場に寄宿舎に熱心に神の福音を説き立てる計りでない、校長始め教職員が熱心に天父を唱讚する、基督教の信仰を鼓吹する、萬事

に付て基督教徒の爲に便利を興へる、甚しきに至りては彼校長等は卒業生の結婚にまで干渉する、耶蘇教信仰の少女を紹介する、結婚式は基督教儀式を用ひしめんとする、基督教を信せざる婦人を娶らせまいと意地張る、嘘ではない、歴然とした證據もある事であるといふ事を聞いた、總てコ一いふ鹽梅なのが札幌の農學校の有様である、斯る基督教の農學校は札幌に於ける智識の源泉である、ドーシテ札幌に耶蘇教が盛にならずに居ましやうか、夫で善く土地の事情を通じて居る人の話に、弘前と札幌とを比較して是れば、弘前の方は餘程オルソドックスに傾いて居るし、札幌の方は頗る自由神學的であると申しました、ソーカモ知れない、併し時勢といふものは妙なもので、近來は農學校内にも耶蘇教の勢力は大に衰へて、教職員も以前の様には干渉せぬ様になり、無宗教者でも佛教者で同校中に餘り不快に感せず居れる様に成たといふ事である、併し今でも勢力の有る事は無論である、ケ様な原因があるから、札幌區内は兎角佛教が振はない、報恩講などに參詣人の多いのは多くは、近傍村落の善男善女が出掛くるのであるといふ事である、併し其割には佛教も盛で、内地の無宗教地の様ではありませぬ、兎に角宗教はマ一盛と申しても宜しからう、此外はズーと町を通過して歩いた計りであるから、格別言ふ事もない、唯町幅の非常に廣い事には驚いた、通りが幾筋もあり、又町幅が廣い故でも有らうが、函館や小樽の様に人の往來は繁く無い、友人を訪れ様と思つたら、町中に出逢て、

暫く道廳に往て待て居た、併し別段感した事も無つた、午後二時頃此友人に送られて停車場で分れて、小樽へ戻つた、此後二十七日にありて、朝小樽を立出して、歸京の途に就いた、歸途は吉田現中といふ浄土宗の僧侶と共に歸京した、此吉田といふ人は甚だ感心な僧侶で、年は弱いが、心掛が善くて、時々施本などをせられる、今は多田公巖君などと共に「北海佛敎」を發行して居られる、歸途の事も汽車中などの話は言ふべき事が無いでもないが、最早随分讀者諸君の清覽へこそ一熟字があるならばを汚したから、茲で擱筆としましやう (終)

信 界

無畏の心

清澤滿之

我々は恐怖の爲に大層に損をすることである、タトへ損をしなくても恐怖は甚だ苦しいことである、何か爲すべきときに當りて恐怖の爲に猶豫逡巡して、終には出来ることを出来なくしてしまふことがある、全體物事は斷然として之を爲せば、随分出来ないことはない位のものである、精神一到何事不成と云ふことは、人の常に口にする所である、此精神一到の勇氣を得るには、臆病を退治せねばならぬ、臆病を退治するには、恐怖の情を退治してかゝらねばならぬ、恐怖の情を退治せんには、先づ其恐怖の起る原因を調ぶることが必要である、地震が恐ろしい、雷が恐ろしい、暴風が

恐ろしい、洪水が恐ろしい、盜賊が恐ろしい、疫病が恐ろしい、國家の刑罰が恐ろしい、社會の批評が恐ろしい、其他詳しくは恐ろしいことは澤山ある、然るに其澤山の恐ろしいことを調べて見ると、ツマリ四つのが其本源である、四つのごときは、一には生命を損失するの恐れである、二には財産を損失するの恐れである、三には名譽を損失するの恐れである、四には權勢を損失するの恐れである、我々は何故に此物事に恐れを抱くか云ふことを知るには、我々は何故に此四つの恐れを持つやを明にすればよい、ソして此四つの恐れは何か我々の間違より生ずるものでないかドーかを考へ、其が何か我々の間違より生ずるものであるなれば、我々は其間違を改正して、恐れの本源を閉塞すべきである、

借説恐れの本源たる四つのは如何なるものであるか、其内權勢を損失するの恐れは如何なるものであるか、全體權威勢力と云ふものは、我々と並び立つ所に其働きを爲すものにて、我一人とか彼一人とかにては、其効用はないものである、故に權勢の損失と云ふても其内に二種の別がある、我々の權勢の損失と人の權勢の増長との二つである、我々は人の權勢が其儘でありて我の權勢の損失することを恐れ、又我の權勢が其儘でありて人の權勢の増長することを恐るゝことである、此時に我々が苦むのはドー云ふ都合であるかと思ふるに、畢竟我の力が人の力に及ばなくして、人の爲に我が壓抑せらるゝから苦しいのである、シテ見れば我々は我實力を養成して決して人に壓抑せらるゝことなき様になれば、我々は

權勢の損失に就て恐るゝことはなき筈である、然れば我々が一概に權勢の損失に恐るゝことは、言れなきことである、我々は勉めて我實力を養成すべきである、

次に名譽の損失に對する恐れは如何なるものであるか、名譽は全く他人の認定によるものであるからして、我の方に於ては之を如何とすべからざるものである、固より其多少は我實力の分量に相當すべき筈のものなれども、實際は決して其通りになりては居らぬ、毀譽褒貶は君子の意に介すべきものでないとは古來の套語である、シカシ若し名譽の爲に心配するなれば、矢張り我實力を養成して立派なる名譽を博するに足るべき根據を固むべきである、ソして置て其上は毀らうと譽やうと人の批評に一任して可なりである、然れば名譽の點に就ても、我々は只我實力を養成するより外の要事はない筈である、

財産に對する恐れは二面に分るゝ、一方には財産がなければ權勢がない名譽がないからの恐れで、此は前の權勢損失の恐れと名譽損失の恐れの内には攝まるのである、他の一方は財産がなければ生命を維持することが出来ぬから財産の損失を恐るゝので、此は後段に云ふ生命損失の恐れの内には攝まるのである、故に實力を養成する道と生命の損失を恐れざる道が明になれば、財産に對する恐れはなくなる筈である、

生命の損失に對する恐れは、總の恐れの根本と云ふてもよろしい、命ありての物種とは一般の通語である、前に云ふ所の實力養成と云ふことも生命のある上の事である、天災地變

水火疾疫等に對する非常なる恐れは、大概皆生命損失の恐れである、其他何とも譯の譯らぬ無意識の恐れと云ふと、大底皆生命損失の恐れと見て差支ない、生命損失の恐れは、實に我々の最大恐怖である、然るに此生命と云ふものは、全體如何なるものであるか、常住なるべきものか、無常なるべきものか、其常住なるは無常なるが、我々の力で左右し得べきことであるかドーか、若し我々の力で如何とすする能はざる所のものならば、其に對して彼れ此れ心配恐怖するは無用のことである、若し無常なる生命が我々の力で常住ならしむることが出来るならば、我々は片時も躊躇することなく、其事に着手すべきである、其時は決して生命の損失に就て彼れ此れ心配恐怖する邊はない筈である、此の如く考へて見れば我々は何れにしても生命の損失に就て心配恐怖すべき理由は少しもない筈である、而して實力の有無は生命ありての上のことであるがゆへに、生命損失の恐れが無用となれば、隨て財産損失の恐れも名譽損失の恐れも、權勢損失の恐れも共に無用となる譯である、

此の如く恐れの本源たる四つのごとに就て調べて見れば、我々の恐れは一つも根據なきものたることは明である、我々の智慮が明白でないから、餘計な心配恐怖を生ずる次第である、恐怖は全く愚昧より生ずる魔物である、我々は智慧の光明を以て此愚昧の魔物を照破すべきである、其智慧の光明と別に遠き所にあるものではない、「生あるものは必ず死あり」と云ふことが明白に信じらるれば、其が即ち智慧の光明

である、「無常迅速」と云ふことが本統に信しらるれば、其が即ち智慧の光明である、「我は本来なきものである」と云ふことが眞實に信じらるれば、其が即ち智慧の光明である、「阿彌陀佛は必ず我を濟ひたまふ」と云ふことが疑なく信じらるれば、其が即ち智慧の光明である

會 報

相 模

◎函東佛教徒同盟會 は去月廿四日秋期大會を開く、依て久我侯爵は同會總裁の資格を以て臨席せられ、本多文學士も同行せられたり、東京よりは猶田中舍身居士も別に客員として出席せらる、當日の會場は足柄下郡蘆子村桐座を以て充てられ、會場前には國旗を交叉し、準備頗る整へり、午後一時開會同地女學校生徒數人立て、オルガンニ合して「君が代」三唱其間來會者一同起立終て會員岸秀岳師登壇開會の趣意を述べ、兼ねて同會は元と函東佛教徒同盟會と稱せしが、今回之を函東佛教徒同盟會と改め、且綱領中於認教云々といふ個條を削除せる所以は警察の干渉に基く旨を辯じて壇を下らる、次に久我總裁壇に登りて、警察の干渉は東京の大日本佛教徒同盟會にも來りたれば、聊綱領中の或箇條を修正せり、元來我々の主張するところ、我會の期する所、一も政治的方面に存するにあらず、唯佛教の爲、國家の爲、六金色の旗下に集りて盡す所あらんと欲するのみなれば、決して性質上行政組織にすべきものにあらず、されど區々たる事項に付て行政官と争ふの愚なるを信するを以て、其警告を容れて或は條項を改め或は之を削除し、施て本會などは會名までも改むるに至れり、然れども精神は元來一貫して變ずる所なけ

れば、益會員諸君の奮發を望むといふ趣意の挨拶あり、次に會頭西岡通明氏佛教會は慈悲心を本とすべしとの旨を丁寧反覆して述べられ、次に衆議院議員安藤龜太郎氏は同會惣務委員の資格を以て、「宗教法律」といふ題下に熱心に辨せられ、次に本多文學士は「社會教育」と題して殆ど一時間、次に田中舍身居士雄辯を振はる題は「宗教と政治」次に大森直觀師の演説ありて散會は午後五時頃、此日天氣最爽快、聽衆は農繁の時節に關らず、無慮千餘名、頗る盛會なりき、

尾 張

◎愛知佛教徒同盟會の發會式 前號會報欄に報道し置きたる同會は、去月十三日同會事務所源通寺に於ていとも盛會ある發會式を舉行したる由し、當日の模様を記せんに、此日各村各戸國旗を掲げて祝意を表するもの多く、會場の門外には綠門を作り國旗并に佛旗を交叉し武場の莊嚴は最も嚴肅を旨とし、鑼で式始まるや各宗各派の寺院僧侶百餘名音樂吹奏の間に讀經あり、右終りて縣會議員、郡參事會員、郡會議員、各新聞記者等の祝詞演説等あり、各地團體より祝電祝文數十通を朗讀し、發起人總代吉田高朗氏の答辭あり、引き續き吉田氏座長となり會則數十條を議せしに、滿場異議なく可決し、評議員の撰出をなし、最後に陛下の萬歲を三唱して式全く終り、紅白の祝菓數千を配し無事散會を告げたりと、此日會するもの三千餘名式場に入るを得ずして歸途に就きしものも不尠と云ふ、同會にては毎年春秋二季大會を開き大に會務を擴張する由、同會設立の際熱心に盡力せられしは、郡參事會員吉田、荒川、永田、鈴村及中村、中西、久田、石原、鈴木等の信徒諸氏と本多顯赫、飯田法良等の諸氏、趣意書並に會則を得たれば左に掲ぐべし、

趣 意 書

夫れ我日本帝國の國體は世界萬國に比類なき金匱無缺の寶國にして上に萬世一系の皇帝在して億兆の民を統御せさせられ其民や克く君臣父子の道を遵奉して淳良なる所以を問はば一に祖先傳來の遺訓の爲きと 天皇陛下の御聖徳の然ら

しむる所さはいへ復た大乘佛教教化薰陶力の之に與りて大に力ありと云ふを憚からざるなり故に聖德太子は日本は大乘相應地と讃仰し玉ひ明に佛教道徳の眞理を以て十七靈法の骨子とし玉へり辱も歴代の 聖主は教徳を深く此佛教に注ぎて天下に仁慈を垂れ玉へり其下に生息したる我々の祖先は偏に帝徳に厚き佛法味と依りて鼓腹の快樂を享有て千有餘年の今日に至るものなり然るに物に換れり星に移れり遂に今日に是れ中外雜居と信教自由の時となり種々に主義の異なる宗教と習慣の異なる人情とを以て我國固有の美徳を攪亂し人心を四分五裂ならしめんことを噫此時に當り固有の佛教道徳を發揮して無上の國體をして益々光輝を放たしめんことを我々佛教徒の急務なり然るに世態の急變は堤を決するの水の如く個人を以て之に當るは不可なり昔人云く一枝の箭は折れ易く一束の箭は折れ難し治國平天下を計らば夫れ宜く同心協力すべしと今も亦爾り個人の信仰は夫れ難しと雖も團結の強なるには加かす況んや大乘佛教の眞理は個人的のものに非ずして社會的のものなるをや故に愛知郡有志の編纂は茲に見る所ありて愛知佛教徒同盟會なるものを組織し内には信佛の因縁を啓發せしめ外には佛教の光輝をして國光と共に益々熾盛ならしめんことを期す希は佛教有縁の諸氏迅速に前陳の趣旨に賛同し奮て本會に加入ありて設立の目的を達することを得ば獨り本會の幸慶耳に非ざるなり

會 則 摘 要

- 本會の會員は名譽會員特別會員正會員の三種とす
- 名譽會員は學識名望ある人士又は本會に殊に功勞ある人士を評議會員より推戴するものとす
- 特別會員は年々半期毎に金廿五錢宛を收むるもの又は一時金五圓以上を寄附するものとす
- 正會員は年々半期毎に金六錢宛を收むるもの又は一時金一圓以上を寄附するものとす
- 毎年春秋二期會員死亡者の追吊法會を修す
- 特別會員の死亡せしときは特派僧を遣し會葬せしむ
- 名譽會員の死亡せしときは特派僧を遣し奠物をなさしむ
- 庶務所を愛知郡(舊五如子)源通寺に置く

信 濃

◎南信笹賀支部 目下同地の有志諸氏は松本滞在中の井上圓了博士を招聘し、佛教大演說會をひらき之か動機として本會の支部を設立せんとて運動し居らる、由、不遠其組織を見るに至るべし、

◎佛教徒信濃同盟會

にては本月十日頃秋季大會を催

しかねて佛教大演說をひらかんとて、本會に向て清澤師招聘の事を依頼されし、師は病氣の故を以て辭退されたるに付、本會より多分本多、眞岡の兩文學士出張さる、事になるべし、同會にては大會後北信北地方等をも遊説を試むる計畫にて日數は十日間の豫定なりと、今や天高く氣清し、各地の教界之より大に振はん哉、

◎印度飢饉救助義捐金總結算報告 過般來印度窮民救助に關し東京大學總長以下の諸氏發起人と爲りて義金を募集し我佛教主義雜誌聯合會に於ても夫れ々々勸募せしが今回同大學學士會事務所内救助事件主任荒尾氏より左の書面並に報告書を送り越されたれば茲に録しぬ

拜啓豫而御贊成被下候印度飢饉義捐金締切決算に相成候に付ては別紙各新聞紙掲載の爲め帝國通信社へ委託したる報告書一葉御參考として御送付致候間御一覽被下度候草々敬具

明治三十三年十月

荒尾 邦 雄

佛教社内 佛教主義雜誌聯合會御中

○印度飢饉救助義捐金 東京帝國大學在學中の印度人ロマカント、ライ、プラン、シン、グ、兩氏發起者となり大學總長初め教授諸氏主として之が贊成發起人となり募集せられたる九拾六圓貳拾壹錢の多額に達せり而して右金額は孰も微細の出金より成立ち就中糧を賣るものあり或は藥價を減するものあり又は兒童にして其小使を婦女にして其叙を投ず達したるものなる由にて今同諸入費を引去り金壹萬四千五百圓今其取扱人なる荒尾邦雄氏の提出せる該募集金の決算報告書を得たれば左に掲ぐ

印度飢饉救助金決算報告

一 金壹萬四千六百九拾六圓貳拾壹錢 收入金總額

内 譯 寄附金

一 金壹萬四千五百七拾八圓七拾七錢 寄附金

金百拾七圓四拾四錢 預金利子
 支 出 之 部
 一金壹萬四千六百九拾六圓貳拾壹錢 支出金總額
 內 譯
 金壹萬四千五百圓 印度國へ送金額
 金百九拾六圓貳拾壹錢 諸國へ送金額
 以上收支の外毎日新聞社紙上に於て寄附金廣告の便宜を得
 たるは本費を助けたるとの最も太なるものに付特に附記す
 右の通り
 明治三十三年十月 學士會事務所 取 扱 人 荒 尾 邦 雄

印度飢饉救恤義捐金

一金九十五圓四十錢五厘 但靜岡民友新聞社取扱に係る分
 一金五十四圓八十錢五厘 但靜岡新報社取扱に係る分
 一金十七圓六十六錢二厘 但靜岡縣師範學校職員及生徒寄附之分
 計金百六十七圓八十七錢二厘
 金十一圓三十六錢 新報社廣告料
 但一行金十三錢を金四錢に減額如此
 金八圓四錢 民友社同斷
 但一行金十三錢を金四錢に減額如此
 金十錢 送金書留信書料
 金七錢五厘 送金爲替料
 小計金十九圓五十七錢五厘
 差引
 金百四十八圓二十九錢七厘 東京 送 金 高
 金二圓 英 宜 觀
 合計百五十圓二十九錢七厘 (右締切切後大日本佛教青年會へ送附依頼の分)

◎本月五日頃より府下購讀者諸君より限り集金
 人罷出可申候に付、御不在なりと御拂渡相
 成候様御取計置被下度此段御依頼申上候也
 十一月

大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十一年十二月廿六日逕信省第三種郵便物認可
 明治三十三年十一月一日發行〇毎月二回一日十五日發行

靜脩小野清著
大阪城誌
 全十二卷合三冊紙 菊判和裝映入美本
 數八百頁彩色入部 正金貳圓七拾錢
 圖三十、表二十四 價金貳圓七拾錢

日本城郭誌
 卷首一冊紙數五十 小十里迄金九錢
 二頁城郭綜覽日本 包百里迄金拾六錢
 地圖一表三 料壹圓迄金六拾四錢

目次 概要
 難波地理彙考 沿革 (一)都市の發達、難波の皇居、攝津の國府、大
 阪の市街、大阪名所起原 (二)土工の串蹟、上古の治水、堀江及び河道
 開鑿、慶長以降の治河及び拓地、明治の築港、治河及び水道布設
 大阪城建築彙考 沿革 地勢 築造 (上)本願寺の創築、本願寺系
 諸石山名稱、原伽藍の建立及び城の創築、伽藍の焼失及び再建
 城の重修 築造 (中)豐臣氏の拓築、豐臣氏系、秀吉年譜、城の拓
 築及び天主矢倉殿等の造營、圖解諸曲輪、殿館、矢倉等の稱
 城の毀壞、築造 (下)徳川氏の修築、石垣、修築、殿館、矢倉等
 の營建、圖解上諸曲輪、本丸、山丸、二之丸、三之丸、圖解 (下)殿館、
 天主矢倉、災變、修造、附記朝廷の鎮臺建遺
 大阪 市制度彙考 城の衛戍 市の政事
 大阪城主交戦紀要 (一)本願寺、天文年間光教ノ細川晴元木澤
 長政等及び日蓮宗徒に當る戰、元龜天正年間光佐の織田信
 長に當る戰、本願寺の退轉及び伽藍の焼失、附記織田氏の
 城地占領、本願寺の再興 (二)豐臣氏前記、盛世及び衰世の
 經過、大佛の建立 (三)豐臣氏上、冬陣、和睦の契約、(四)豊
 臣氏下、夏陣、殿館、天主矢倉等の焼失、豐臣氏の滅亡、附記徳
 川氏大陣、中入の徳島、鳥羽伏見の戰、殿館、矢倉等の焼失
 日本城郭總論 天主矢倉總論 古今城郭攻守偉事略言 廢城
 表、慶應現在幕府諸大名城郭陣屋及び明治公定存城表、日本
 全國石高公家武家所領并に社寺領表、慶應現在存城郭要害
 陣屋及び明治公定存城綜覽表
 明治三十三年三月

發行所
 東京下谷區上根岸町百十番地 靜脩書屋
 東京京橋區南傳馬町一丁目 吉川半七
 大阪南區心齋橋筋南一丁目 松村九兵衛

政教時報第四十二號